

伊丹公論

復刊
第6号
通巻25号

発行所
伊丹市立図書館ことば蔵
伊丹市宮ノ前3-17-14
☎072・784・8170
編集
伊丹公論編集委員会

柿衛文庫が開館30年

「ことば文化都市伊丹」に結実

本年11月3日、公益財団法人柿衛文庫は開館30年の節目を迎えた。元伊丹市長でもあり創設者の岡田利兵衛から寄贈された柿衛文庫所蔵の貴重な品々は東京大学図書館「酒竹・竹冷文庫」、天理大学附属天理図書館「綿屋文庫」とともに3大俳諧コレクションの一つと称されている。今回はそんな柿衛文庫の30年間の歩みの一端を常務理事・館長の今井美紀氏にご紹介いただく。

伊丹を愛した創設者岡田利兵衛

伊丹市名誉市民第一号で国文学者、聖心女子大学名誉教授の岡田利兵衛は雅号で、その柿を「衛る」という意味を有する号である。岡田柿衛は、伊丹小・伊丹中学校から酒に魅せられて伊丹に遊んだ当時の一流の文人たちが、岡田邸の庭にあった珍しい品種の柿「台柿」の美味を激賞したのを、その柿を「衛る」という意味を有する号である。



芭蕉の貴重な初出品資料に見入る来館者たち＝柿衛文庫で

第三高等学校・京大を卒業後、家業の酒造業を継ぐとともに伊丹町長、伊丹市長の要職を歴任、一方で伊丹を代表する俳人鬼貫や、俳諧の文藝的地位を確立した芭蕉を中心とする俳文学の研究にいそしみ、研究のための俳諧資料の収集を本格化させた。また早い時期から郷土伊丹の魅力を広く知らしめる文筆活動を展開、雑誌「上方」や「郷土研究伊丹公論」などに寄稿している。

歴史ある伊丹に蓄積された文化遺産と収集した俳諧資料を末永く伊丹の地に伝えたいという岡田柿衛の希望は、伊丹市の全面的な支援を得て昭和57年(1982)7月1日に財団法人柿衛文庫が発足して実現。さらに平成23年(2011)11月1日をもって公益財団法人への移行が認定された。

「みやのまえ文化の郷」の中核施設

昭和59年(1984)6月、旧岡田邸敷地内に白壁瓦葺きの酒蔵風の建物が完成、11月3日の開館を迎え、翌年3月には登録博物館として官報告示された。昭和62年(1987)には増設のかたちで伊丹市立美術館が開館、展覧会部門を中心に柿衛文庫と一体的運営がなされるようになる。さらに平成元年(1989)には美術館に隣接して市立工芸センターが設置され、平成7年(1995)の阪神・淡路大震災の被災で解体修理後国の重要文化財に指定された旧岡田家酒蔵や、移築された兵庫県指定文化財石橋家住宅などとあわせて「みやのまえ文化の郷」がオープン。伊丹市内外から訪れる

人々に、伊丹の豊かな歴史・文化を楽しんでいただけるゾーンとなっている。また当文庫の存在は、その後伊丹市の教育特区として「ことば科」の設置や「ことば文化都市」の標榜にいささかでもお役に立ったのではないかと自負している。

特色ある活動に兵庫県文化賞

柿衛文庫は開館20周年にあたる平成16年(2004)に、文化的活動による功績が顕著で文化の向上発展に貢献したと

認められて、兵庫県文化賞を受賞した。博物館施設の使命である資料の①収集・保存・公開、②調査・研究・出版、③講演会・講座・研究会・作品募集等といった多岐にわたる事業を、俳諧・俳句関係資料という価値は高いが地味な所蔵資料の特性を引き出し生かしながら展開し続けた点が高く評価されたと聞く。

当文庫の所蔵資料は当然ながら古く脆弱なものが多く、その保存と公開は矛盾することになる。すなわち資料にストレスをかけることなく次代へ引き継ぐためには収蔵庫に大切に保存すればよいが、それではせっかくの実物に本物に接する楽しみを多くの人が味わい、その資料に新しい時代の目による新しい価値を与えることはできない。したがって各種の技術や研究を参考に、兼ね合いをはかりつつ公開を行ってきた。

ベルギーでも所蔵資料展

当文庫では借用資料を含めた特別展が年2回と、その間所蔵資料主体の企画展が年数回行われている。また他館展覧会への出品、書籍やテレビ番組への掲載・放映など種々の形で所蔵資料が公開される。中でもヨーロッパ・ジャパンへの出張展はたいへんな事業であった。日本政府の肝入りでさまざまな日本文化をヨーロッパの国に紹介するこの催しに当文庫は伊丹市の姉妹都市ベルギー・ハッセルト市の文化会館での所蔵資料主体の展覧会開催を要請された。気候風土も言葉も価値観も異なる地で日本の古い時代の作品の展覧会開催にとまどうことも多かったが、期間中、ベルギー王妃を始め多くの観覧者に驚きと喜びをもって迎えられ、文化を通じた国際交流の重要性を再

認識させられた次第であった。

こうした展覧会だけではなく、各種の講座や講演会も開催している。ケースのガラス越しに実物を見るだけではなく、話を聞き、自ら創作し、研究を試みることで、俳諧・俳句や言葉、そして日本の文化に親しみ味わう楽しさを知っていたためである。

初出品資料を含め芭蕉資料が一堂に

資料公開の前提には、綿密な調査研究が不可欠である。今秋の開館30年記念特別展「芭蕉」では30年間の活動蓄積を踏まえて文庫の総力を結集、貴重な初出品資料がずらりと並び来館者を驚かせたのである。今後こうした実績をもとに広く開かれた俳諧俳句文庫としての個性を生かした着実な歩みを続けていきたい。

日同条例が施行されました。

「清酒発祥の地」という点では、今まで両市とも当地こそが清酒発祥の地と主張し、どちらが本物かとの論争が続けるライバル同士でしたが、この乾杯条例の施行をきっかけに、どちらが先に清酒を造ったかではなく、お互いが共に清酒の町を盛り上げようという流れに変わったのです。

そして、本年10月12日に伊丹市の旧岡田家酒蔵で奈良市、伊丹市の両市長、酒造関係者が参加するフォーラム及び両市の地酒の飲み比べ会が開催されました。続いて11月30日には奈良市で同様のフォーラムが開催されます。

このようにお互いに長い歴史をもつ伊丹市、奈良市が、近畿に2カ所ある「清酒発祥の地」を、共にアピールしていくことになりました。

〈山中鹿介の子が酒造り〉ところで今年の上半期はNHKの大河ドラマ「軍師官兵衛」で伊丹城主・荒木村重、有岡(伊丹)城が取り上げられ、話題になりました。天正18年(1579)に有岡城は落ちましたが、その後慶長5年(1600)に関ヶ原の合戦が起きたまさにこの年に、伊丹でもお酒に関する重要な出来事がありました。

毛利との戦いで敗れ、斬殺された山陰の武将・山中鹿介幸盛の長男・山中新右衛門幸元後に名を換えて鴻池勝庵と名乗る(は幼少の当時、摂津国・鴻池村の叔父の山中信直の元に身を寄せていました)が、その時に酒造りを開始し、その酒を江戸に運んだところ大いに名がやされ、「大変おいしい」と評判になったのです。その酒について寛政6年(1794)に鴻池家の子孫が大坂奉行所に出した書状に、「私先祖、澄み酒を造り始め、これを生諸伯と申し候」とあり、この澄み酒を清酒と解釈して、所謂「清酒発祥の地」と伝えられるようになりました。

ところで、この清酒ができたきっかけとして一説には、灰を入れたざるを誤って酒の中に落としたのが、翌日には澄みきった酒になり、味もよくなったことから清酒が誕生した、或いは使用人が主人に叱られた腹いせに酒の貯蔵樽に火鉢の灰を投げ込んだところ、濁り酒が一夜にして清く澄み、味も香りもまろやかな酒になったなど、諸々の説があります。

一方、奈良のお酒は、酒造りが朝廷から寺院に移る室町時代に、正暦寺で造るお酒(僧坊酒)が三段仕込みや火入れを行って清酒を造り始めたこととされています。(2面につづく)

英雄と酒が結んだ 運命の小説

「月に捧ぐは清き酒」 著者インタビュー

清酒発祥の地伊丹が舞台の小説「月に捧ぐは清き酒」が今年 3 月に出版された。1 面（武内社長特別寄稿）にも登場する山中新右衛門が鴻池で清酒を発明し、全国に広める物語である。自身も日本酒好きという著者の小前亮さん（38）＝東京・中野区＝に直接電話インタビューした。――伊丹が舞台の小説を執筆したきっかけは

私は月山富田城下（島根県安来市）で生まれ、山中鹿介が英雄でした。いつか鹿介を書きたいと思い、資料を集めていたのですが、調べるうちにその息子新右衛門の人生に魅力を感じるようになりました。悲運の武将の息子が生き延び商人となつて成功する、このロマンに惹かれたのです。また、私の生家の向かいに酒蔵があり、伊丹の酒蔵通りと似たふと歴史を感じさせるものがあると、それを手がかりに過去の情景が浮かびあがってきました。そういう歴史の連続性が感じられて、素敵なまちだと思いました。



――作品のポイントはいかに酒造りでしょうか。江戸時代の技術書を読むと、当時の技術の高さに驚かされます。顕微鏡のない時代に、試行錯誤で現代にも通じる手法を生み出していたと思うと感動しますね。物語としては、

酒勝負や最後の対決など、権力者とのやりとりを楽しんでいただけでは幸いです。あと、主人公夫婦のバカップルぶり（笑）。彼らは本当に仲の良い夫婦だったことが伺えるので、何とか表現したかったです。

――伊丹市のイメージは

私は野球が好きで、今も草野球でセンタリーを守っています。伊丹からは田中投手、坂本選手など超一流の野球選手が輩出したまちというイメージがありました。行ってみて感じたのは、酒蔵通りはもちろん、城跡が残っていて、水路があつて、昔の雰囲気や想像できるのが素晴らしいですね。現代の街並みのなかに、

ふと歴史を感じさせるものがあると、それを手がかりに過去の情景が浮かびあがってきます。そういう歴史の連続性が感じられて、素敵なまちだと思いました。

――読者へのメッセージを

主人公のお酒で幸せを届けたいという願いや、簡単に諦めるなどという思いを感じて欲しいです。ぜひ、この作品を読んで、伊丹の偉人山中新右衛門をもっと知り、誇りにしていただきたいです。最後に、乾杯は日本酒で！



小前亮プロフィール

昭和 51 年（1976）2 月生まれ。東京大学大学院人文社会学系研究科修士。

平成 17 年（2005）、「李世民」でデビュー。今年 9 月、最新作「賢帝と逆臣と」を出版。

平成いたみ八景⑥ 朝日を浴びて「御願塚古墳」



増丘墓は家族墓から主に個別墓となり、格段に規模が大きくなり、また副葬品も増えた 3 世紀中頃から 6 世紀末を古墳時代と呼ばれている。御願塚古墳はその

300 歳の範囲内に、他に 4 基の古墳があり、それらを合わせての呼称であったとされている。

全長 52 メートルの墳丘の周囲は水濠が巡っていて、その後の調査で更にその外周にも水濠があったことがわかった。後円部の北側や前方部より「造りだし」があった。当時はそこで祭事が行われたのだろう。

周辺の古墳は破壊されてしまったがこの古墳が残存したのは江戸時代に墳頂に建立された南神社が祀られていたこと、また地域住民の保存活動によるものである。

古墳と神社はどこにあつてもそれとなく認識できる。これは両方共は一定の

（一面からのつづき）

◇辛口の伊丹酒が江戸で大評判 実際

この後、伊丹の酒は奈良の酒の製造技術を基に木炭でろ過するなどの技術革新が進み、それまでの濃厚な甘口の酒とは違う辛口の酒として、江戸を中心に販売を伸ばして行きます。

この鴻池勝庵によって大々的に江戸で売り出された酒は、またたく間に美味しさと評判になり、江戸時代初期から中期まで伊丹の酒が繁栄し続けることになりました。

そのにぎわいの記録として、伊丹の酒造家は元禄 10 年（1697）には 36 軒、正徳 5 年（1715）には 72 軒、天保 12 年（1841）には 86 軒に増え、造り酒

屋が本間筋（伊丹郷町）を中心にずらりと建ち並んでいた、とあります。

さて、伊丹や灘などの上方で生産された洗練された諸白（清酒）は、江戸に運ばれ、「下り酒」と呼ばれます。この下り酒は江戸時代前期から中期までは伊丹酒・池田酒が、後期には灘酒が増え、江戸

の需要の 8 割を供給するのです。当時、江戸周辺で造られた酒は醸造技術が進んでなく、濁酒に近いものでした。この時代の江戸の町は 50、60 万人の人が住む巨大な消費のある大都市で、その必需品をまかなうために全国から品物を集め、江戸へ積み出す町として大阪が一躍

発展します。そして、「江戸積 11 品」と呼ばれた江戸の必需品の一つに、この「下り酒」が含まれていました。

余談ですが、江戸時代前期には上方の方が文化、技術に優れているものが多く、こうしたものが上方から江戸に下ったので、優れている物や高級品を「下りもの」、そうでないものを「下らないもの」と呼ぶようになりました。

◇大阪に出て財閥に 閑話休題。こうして清酒の開発と江戸への販売で財をなした鴻池勝庵の 8 男である鴻池善右衛門は、やがて大阪に進出して大阪鴻池本家を創めて、鴻池財閥ができました。

当時の鴻池家の屋敷のうしろには大きな池があり、これを鴻池と言い、後にこれは村の名の由来となり、また、その名前を大坂の店の屋号として用いて、後の

「昭和天皇実録」に登場する 3 人の伊丹ゆかりの歴史人

平成 26 年 9 月 9 日、宮内庁は「昭和天皇実録」を公表した。87 歳（1901、89）の生涯に 3 人の際立った伊丹ゆかりの人物がいる。

一人は政治家近衛文麿である。昭和 12 年（1937）、16 年（1941）と戦中 2 度首相を務めた。そして日露戦争で軍神と云われた乃木希典である。学習院長として質実剛健の精神を身体で学ばせた。3 人目は昭和天皇の教育掛として帝王学を講じた杉浦重剛だ。王者はいささかも私心を挟んではならないと皇太子に説いたという。

近衛は伊丹の旧領主家だ。五撰家の筆頭として朝廷に仕え明治以降も代々政治家として、日本の舵取りを行った。江戸期では、伊丹を天下の酒造都市に押し上げた。いまでも近衛さんの愛称で親しまれる。市章は近衛家の蟹牡丹で、猪名野神社には野宮神苑の揮毫碑が建つ。終戦後 GHQ の出頭命令の前夜青酸カリで自殺した。

（郷土史研究者 森本啓一）

三和銀行、今の三菱東京 U F J 銀行になっています。

第一回はここまで：

これからお酒の美味しい季節になってきました、よき友と美味しい料理で秋の夜長をお楽しみください。

＊ ＊

清酒発祥の地フォーラム開催

10 月 12 日、旧岡田家住宅・酒蔵で伊丹市と奈良市による酒造りの歴史紹介など清酒に関連したフォーラムが開催された。フォーラム当日には 2 月に大雪の被害を受けた奈良市の正暦寺修復のために伊丹酒蔵協議会が始めた募金が正暦寺の住職に手渡され、フォーラム後には、鏡開き、振まい、利き酒会も行われ大盛況だった。



マイクロ・ライブラリー アワード受賞 市民が作る本棚「カエボン棚」

おすすめの本を交換できる「カエボン棚」が個人または小さな団体が作る図書館に与えられる賞「マイクロ・ライブラリーアワード」を平成 26 年 8 月 31 日に大阪府立大学学長から授与された。

「マイクロ・ライブラリー」とはカエボンのように個人または小さな団体が、個人の蔵書や地域で集めた本を広く開放し、閲覧や貸出を行っている私設図書館のことで、現在全国に 500 カ所以上ある。

昨年からは情報交換や互いを讃えあう目的で「マイクロ・ライブラリーサミット」が開催されている。今年から新設された「マイクロ・ライブラリーアワード」は全国から選ばれた 27 団体が受賞した。民間団体 NPO や商店街、病院などが多い中、カエボンは市民が主体となり公共図書館の機能を最大限に活用することで、まちの活性化や図書館の利用促進、読書環境の充実を図っていることが評価されている。

大学時代、演劇部の制作を担当したこと、劇場勤務を希望、伊丹市文化振興財団に入る。最初の2年間は伊丹アイフォニックホールの施設管理と伊丹市民オペラ担当だった。それから、いたみホール、ラストホールを

声なき人の声を言葉にしたい

経てアイフォニックホールへ戻って来た。そして今度は、伊丹市民オペラ公演実行委員会の事務局長になった。「一人歯痒い思

曲「林檎幻燈」が劇作家・岩崎正裕氏に留まり、劇団太陽族で上演された。それをきっかけに、この2年間で「第6回富士山・河口湖映画祭」ナリオコンク

の宝である。(村上有紀子)



写真協力＝西田写真館

現代人物

風景



西史夏さん

公益財団法人伊丹市文化振興財団
伊丹アイフォニックホール 副館長

を生かすことができる「です」とキラリと微笑む。もう一つの担当の「地球音楽プログラム」では

の現場経験が相乗効果となり仕事にもつながっている。

これからの仕事を尋ねると、「副館長としては、多様で幅広い芸術の扉を開き、文化を目的とした交流の場を伊丹に作る手助けをしたい。また劇作家としては、この瞬間、瞬間の人間を書き残し、今の時代に生きた証を残したい。私は表現することでしか生かされないから」。どちらの「西史夏」も伊丹



伊丹市役所前に設置してある石碑

「本市に「市民憲章」があるのをご存知だろうか。

昭和40年代に全国の自治体で住民の自治意識の高まるなか、昭和45年(1970)に市制30周年を記念して「伊丹市民の誓い」が住民の総意に基づき制定された。

他の多くの市町村が「憲章」とする中で「誰にでもわかりやすい名称を」との声を受けて「市民の誓い」としたことが大きな特徴である。

市役所の前にはこの「市民の誓い」を刻んだ石碑があり、制定から長い月日を経てもなお「市民一人ひとりが、伊丹を愛し、伊丹市民としての誇りと責任をもつて行動する」ことの重要性を訴えている。

伊丹市民として、この「伊丹市民の誓い」を生かして生活したい。

＊ (橋岡昌幸) ＊

伊丹市民の誓い

わたくしたちのまち伊丹は、猪名野笹原とうたわれた昔から、豊かな自然にはぐくまれ、高い文化をきずいてきた由緒あるまちです。

わたくしたちは、この伊丹を、より平和で、美しい豊かなまちとして、さらに発展させ、これを次代にひきつがなければなりません。このために、わたくしたちは、伊丹市民としての自覚にたつて、市民の誓いを定めます。

一、健康で、明るい家庭をきずきます

一、秩序と規律を守り、住みよいまちをつくります

一、自然と文化財を大切にし、美しい環境をつくります

一、人には親切にし、老人や子供をいたわります

一、仕事に自分を生かし、楽しく働きます



丹尚堂

〒664-0858 伊丹市西台1-1-1
阪急伊丹駅ビル・リータ 1階・3階 ☎072-775-0150



創業当時の丹尚堂(山田時計店)

ぶ(尚)「お店」という意味。

先やスタッフ同士でもまごころを大切に接している。「丹尚堂」はことば蔵と同じ宮ノ前に「山田時計店」として明治32年(1899)創業。以来115年間、お客様に美しさと信頼をお届けしてきた。丹尚堂の専務取締役である山田哲さん

(45)にお話を伺った。「うちでは、ベテランスタッフが他店で断られた時計の修理にも親身になって取り組んでいる。確かな腕と目利きによる宝石のリフォームなど、本物の「サービス」を提供していきたい。ジュエリー離れが進む中だが、若い世代や30代、40代のバブルを経験した世代にももう一度宝石を手にして頂きたいと語る。最後に同社の会長である山田宏さん(76)からも「本年、お蔭をもちまして創業115年を迎えることの喜びを社員一同、更なる感謝の心で、真心接客につとめていく所存です。たとえ会社の規模は小さくなくとも、より以上に中身を強くすることが大切であり、115年の信頼を日々の職業を通じて地域の皆様へ奉仕していきたいと考えております」とメッセージを頂いた。丹尚堂は1899年創業以来、現在まで「美」を追求している。

こだわりの昆虫グッズ

【郷土土産品紹介】

お土産といえば、飲食物や工芸品が多いが、「そこへ行った想い出」を得るものとして美術館や博物館のミュージアムショップはどうだろうか。今回は

来年で25周年を迎える伊丹市昆虫館(昆陽池3)をとりあげる。

昆虫館のミュージアムショップは入館してすぐの場所にあり、ワクワクしている来館者の期待をさらにふくらませているつくりになっている。昨年4



写真好きの館長撮影の昆虫の缶バッジも健闘しているらしい。

(齋藤芳弘)

伊丹俳壇

最優秀賞

天高し老老で酌む昼の酒

南北 佳昭 (伊丹市)

「老老介護」は当世の課題というか、深刻な問題だが、さて、「老老昼酒」はどうか。これって、あってもよさそう。ことは蔵ロビーで、伊丹老老昼酒の日、なんて始めたらどうだろうか。もちろん、俳句も皆で作ろう。読書についてくだを巻くのもよい。楽しい昼酒になるだろうなあ。

優秀賞

婚約や息子囲みてまず一杯

杉本 圭子 (東京都新宿区)

独り酌む良夜の一献官兵衛に

和田 禮子 (伊丹市)

エプロンの親父とかるく今年酒

小松 房子 (伊丹市)

彼は来ぬホットワインの冷める夜

世叛 (栃木県宇都宮市)

春満月漱石読んで独り酒

衛藤 夏子 (大阪府枚方市)

「伊丹公論」名物コーナーの「伊丹俳壇」。

今回の兼題は、清酒発祥の地伊丹らしく「酒」。酒をテーマに全国から様々な句が集まった。電子申請や郵送による県外からの応募もさらに増え、「伊丹俳壇」が全国区になりつつある。

次回は題「本」の短歌を募集し、「伊丹歌壇」をお届けす



坪内稔典プロフィール

愛媛県出身。立命館大学卒。2001年、第9回句集「月光の音」で第7回中新田俳句対象スウェーデン賞を受賞。2010年、「モーロク俳句ますます盛ん俳句百年の遊び」で第13回桑原武夫文学賞受賞。佛大学教授、京都教育大学名誉教授。柿館文庫也雲軒塾頭。第2回ひがし商店街五七五大賞選者でもある。

第2回 日本一短い自分史

大賞に南本町の櫻井さん

「香典を渡した後で、あれ!？」

人には賞品として1万円分の図書カードが贈られた。大賞を受賞した感想は「まさか受賞するとは思わなかったので驚いた。嬉しい。大賞作品の全文は以下のとおり。」

今から四十年前程前、田園地帯の広がる北関東でのことだった。「Tさん宅の葬式

に行ってくれないか」若手社員の私は、職場の課長から声をかけられた。会社を代表して葬儀に参列しろという命令だ。会社と個人からの香典を預り、場所・時間・名前を聞いて「ああこの辺りの集落だな」と見当はついていて、喪服に着替えて社用車でその集落に行くと、T家葬式の看板はすぐに分かった。家の前に車を止めると、「櫻井さんよく来てくれた」と声が。顔見知りのパートさんが出迎えてくれた。あ、この方も一族なのだ！とお悔やみを言いつて、隣組の方が大勢待機する受付に行き、十件ほどの香典を渡した。それからだ！

「何か違うな」という空気を感じた。祭壇の前で焼香をしようと写真を見ると、どうみてもおじいさんの遺影だ。聞いていたのは「お父さん葬式」のはずだった。通された座敷に座り運ばれたお茶を飲みながら、「どうも葬式を間違えたようだ」と悟るのに時間はかからなかったが、困った。冷汗が流れ、時間が一瞬止まった気がした。「何とかしなければ」

預かった香典は会社や個人の志だ、当人に渡さないわけにはいかない。仕方がない、覚悟を決めて謝るしかない。座敷を辞した私は、パートのTさんを見つけ事の次第を話した。「ああそのTさんの葬式ならここから少し先の家だよ、



西川かよこ、松本昇、加藤八重子。11月9日には、表彰式が行われ、4人には表彰状、櫻井さんには表景状、櫻井さん

同じ名前が多いからね、この辺りは」と許してくれた。受付の隣組の方は香典を返しつづ、墨書の台帳に一件ずつ縦に線を入れ消し込んでいく。台帳のほぼ一頁が真っ黒に消し込まれてしまった。受付の方の何とも言い難い顔は、今でも脳裏から離れない。

「あとから出直しますから」と言い残した私は、あわてて本来行くべき社員のTさん宅へ急行した。しかし時既に遅く、葬列は家を出発し墓地に向かっていた。香典は渡したが、この葬式もまた取り返しがつかない事態になっていたのだった。

記している。予定では、3日のうちに、万博会場へ到着するはずだったそうだが、騒音と排気ガスの中、硬いアスファルトは歩きにくかったのか、足を痛めたゾウが出て、やむなく武庫川で野宿をした。4日朝、171号を東進し、1日待ちぼうけをくった市民たちが道の両側や歩道橋の上にすずなりになって見まもるなかを会場へ向かい、午後2時ごろ無事に万博会場動物飼育場へ到着した。

伊丹今昔物語

ゾウ16頭が国道を行進

今回は伊丹市のほぼ中心を横断する国道171号にまつわる話を紹介する。昭和45年(1970)、「人間の進歩と調和」をテーマに掲げ、77カ国が参加し、当時至上最大の規模を誇った「日本万国博覧会(万博)」が開催された。

この万博で8月12日に行われた「タイ・ナショナルデー」に出演するため、16頭のゾウがタイから神戸まではるばる12日間の船旅をしてきた。8月3日、神戸港についたゾウ16頭は、国道171号を歩いて万博会場を目指した。当時の「広報いたみ」(昭和45年8月15日号)では、「先頭と後尾をバトカーや指導車、広報車でかため、沿道には、見物客整理のおまわりさんがぎっしり」と当時の様子を



緑丘小学校前を行進するゾウたち (伊丹市立博物館所蔵)

当時を知る、伊丹市理事の増田平さん(56)は、「目の前でゾウが糞をし、後ろに続く係員が糞を掃除していたのが印象的だった」と語っている。

また、伊丹市商工労働課中村雅光さん(50)は「普段、動物園でしか見られないゾウの隊列が道を歩いていて興奮した」と語った。

44年が経過し、171号沿道も随分と姿を変えた。

ンが多くなる。

さて、わが身を振り返ってみれば、今年5月に「西」を旅したことは大きな出来事だ。西ってどこだ？ さて、よく国名を「日」「米」と漢字一文字で表すことがある。「独」「伊」などは想像しやすいが、では「西」とは？

▼本場のバル体験！

そう、「西」はスペインのことである。国名は漢字で「西班牙」と書く。(偉そうなことを言ってる拙者も初めて知ったが)何故、行ったかって？ ガウディに会いに？ もちろん、それもあるがそこは吞兵衛。本場のバルを味わいに行ったのだ。やっぱり本場はええ！ 伊丹をはじめ



大杯目

ことばの雑学

今年ももうすぐ終わりを迎える。新聞やテレビでも「今年の重大ニュース」や「今年の流行語」など、2014年を振り返るシー



ール、夜はワインに楽しく酔った西班牙旅行だった。(ときわ喜多)